

情報モラル教育プロジェクト 研究報告

1. 活動内容

(1) 研究概要

スマートホンや携帯電話などが児童にも幅広く普及するようになった近年では、小学生によるインターネットに関わるトラブル（以下ネットトラブル）も増えています。ネットトラブルを起こさない、または、被害を極力小さくするための判断力育成を情報活用能力の一つとしてとらえ、研究を進めました。研究の大きな目標として、ネットトラブルを未然に防止する判断力育成と、保護者への情報モラル教育の啓発を掲げ、情報モラル教育の普及に努めました。

(2) 目指す子ども像と保護者像

情報モラル教育の基本的構造は、日常モラルとネット特性の理解という二本柱を身につけることで、判断力を養うことです。日常モラルは、家庭教育と学校教育の全般で身につくものなので、今年度の研究ではネット特性の理解に注力しました。ネット特性は学ばなければ、児童にとって理解することが難しいためです。そこで下記のような目指す子ども像を設定しました。

- ・ ネット特性をしっかりと理解する子
- ・ 先のことを考えた想像力をもつ子

この子ども像をもとに、手立ての考案と実践を進めてきました。

また、情報機器を児童に与えるのは保護者であり、本来的には情報機器の使い方の指導やトラブル時の責任は保護者が負うものです。そこで下記のような保護者像を目指し、啓発活動にも注力しました。

- ・ 情報モラルを躰けられる保護者

(3) 手立て

本プロジェクトにおいて特に理解させたいネット特性は、記録性、流出性、公開性、非対面性、即時性の5つです。全学年の児童にとって平易となるようにそれぞれを、残す力、広める力、見せる力、伝わりにくさ、繋がる力と言い換え、更に各言葉の頭文字をとって、インターネット「のひみつ」という合言葉を設定しました。この合言葉を中心に授業などを行うこととしました。

実践① 日常的指導「説話」

5つのネット特性をまとめて理解することは、児童にとってハードルが高いため、朝の会などを活用して、日常的にネット特性を一つずつ指導しました。週に1回、5分程度の説話として身近な出来事やニュースから、ネット特性に関わるものを話しました。「SNSに悪口を書くとあつという間に広がるね。広めていいか考えて、よりよく使いましょう」といった形で、最後は必ず前向きな気持ちになれるように留意して話しました。

実践② 教科内指導「特別活動」「道徳」「国語」など

前期はネット特性の合言葉を整理し、覚える授業を行いました。その定着を確かめるため、後期は身近な事例を資料とし（NHK for school など）、授業を行いました。ネットトラブルの中に見

られる良い点悪い点を、ネット特性を判断基準として考えられるように授業を組み立てました。

実践③ 保護者への啓発「学校説明会」「講演会」「授業参観」「配布資料」など

情報モラル教育の基本的な構造や、ネット特性の合言葉などを折に触れ保護者へ直接伝えるように、学校行事と様々なタイアップを図りました。保護者が多く集まる、学校説明会や授業参観を活用して、情報モラルの講演会を開いたり、授業を参観してもらったりしました。あわせて情報モラルについて家庭で話し合いができるように、資料も配付しました。

2. 成果と課題

(1) 成果

インターネット「のひみつ」という合言葉は児童・保護者ともに覚えやすいもので、大変効果がありました。児童の中から画像やSNSに対して慎重に扱いたいという声が挙がるようになりました。保護者からは、情報モラルの話や合言葉をもっと早く知りたかった、子どもと会話するときのきっかけになったなどの声が聞こえてきました。合言葉を中心としたネット特性の理解には、大きな手応えを感じました。

また、教員側も情報モラル教育の基本的構造と合言葉を理解すると、情報モラルの授業が行いやすいということが分かりました。本プロジェクトに参加した若い教員からも、授業がしやすかったとの振り返りがありました。またその中で、ネット特性を理解したうえで、どこまで相手を思いやって行動できるかという、日常モラルの重要性も明確になりました。どんな道具も最後は扱うその人の人間性にかかっています。情報モラルにおいても同じことが言えることが分かりました。

(2) 課題

合言葉は分かりやすく、情報モラルへの入り口としては有効でありましたが、「のひみつ」という字面をただ暗記するだけでは意味がありません。折に触れ会話ができる学級の児童や、関わりの深い保護者などには浸透しましたが、現場の教員集団への普及は難しいものがありました。合言葉は聞いたことがあるけれども、それが何を意味しているのか分からないという声がよく聞かれました。

情報モラルは教科に組み込まれていないため、授業時間の確保も難しいものがありました。研究のために時間を割くことがあっても、ネットトラブルの未然防止という観点から進んで授業の時間を確保しようとする動きを作り出すまでにはいきませんでした。

3. 次年度に向けて

今年度の研究で、日々の説話や合言葉による指導が効果的であることをはっきりさせられました。また、保護者も情報モラルに興味をもっていて、情報の積極的発信を待っているということが分かりました。次年度は、今年度の成果をより広く普及するための年にしたいと思います。合言葉を中心に、誰でも使いやすい情報モラル説話集の編纂や、授業にすぐ使える教材開発、学年に応じたネット特性や権利指導のカリキュラム作りなどを進めていきます。社会のニーズが高まる中、無理なく、分かりやすく情報モラル教育が行われ、浸透していく仕組みが構築できるように研究をまとめていきます。